

K市の保育所等における災害時非常持ち出し袋の実態

A picture of emergency bags at nursery schools in K city

千葉 武夫¹・清水 益治²

CHIBA Takeo

SHIMIZU Masuharu

本研究の目的は、K市における災害時非常持ち出し袋の実態を調査し、その充実に影響する要因を分析することであった。K市の保育所・認定こども園の各園から1名が参加した研修においてアンケートを実施し、180名の回答を分析した。その結果、救急用品、ビニール袋、タオル、ミネラルウォーター、紙おむつは多くの園の災害時非常持ち出し袋に入っていた。防災教育の実施が災害時非常持ち出し袋の充実につながることが明らかになった。これらの結果を保育の内容に関係づけて議論した。

問題と目的

本研究の目的は、K市における災害時非常持ち出し袋の実態を調査し、その充実に影響する要因を分析することである。

これまで我々は、全国の幼児教育施設（千葉，2016；清水・千葉，2016）、児童養護施設（波田埜・清水・吉岡・青井・森・西村・碓氷・水上・成田，2016）、放課後児童クラブ（清水・千葉・碓氷）の災害マニュアルの実態を調べ、マニュアルの充実には災害関連サイトの閲覧経験が有効であることを見出した。また、森・碓氷・青井・波田埜・清水・吉岡・成田・水上・西村・千葉（2016）は、保育士養成施設で災害や防災教育をどの科目で教授しているかを調査し、「保育内容（健康）」や「子どもの保健Ⅱ」といった災害にかかる内容が指定されている科目以外でも、災害や防災に関する内容を取り扱っている科目があることを示した。千葉・西村・吉岡・森・碓氷・中島・波田埜・水上・成田・青井・清水（2020）は、非常時に持ち出す名札や名簿に記載する内容を調査し、災害関連サイトを閲覧している園や各災害マニュアルを準備している園がしていない園よりも、名簿や名札に入れる情報が充実していることを示した。さらに千葉・清水（2021）は、1つの政令指定都市（K市）に焦点を当て、研修を受講している園の方が受講していない園よりも、子どもへの防災教育に力を入れていることを見出した。

本研究の主たる関心である災害用非常持ち出し袋の実態に関して、清水・千葉（2019）は、2018年8月現在で入手可能な論文をレビューし、全国調査を行い、幼稚園・保育所・認定こども園を比較し、災害関連サイトの閲覧経験の有無別に袋に入れているものを調べて、以下の結果を得た。すなわち、①非常持ち出し袋の実態や意識調査に関する研究の論文からは、改善へのヒントが得られにくい、②非常持ち出し袋を災害・防災・減災教育に役立てようとする取組の実践研究の論文には「非常持ち出し袋」が有効な教材であることが示唆されている、③保育所の方が幼稚園よりも非常持ち出し袋がある園の割合が高い、④保育所の方が幼稚園よりも非常持ち出し袋の内容が充実している、⑤災害関連サイトの閲覧により、災害関係機関一覧表や防災マップを袋に入れるようになるという結果を得た。

本研究では、清水・千葉（2019）が全国調査で調べた内容を、千葉・清水（2021）に

¹ 聖和短期大学 学長

² 帝塚山大学 教育学部 教授

ならって対象をK市に限定し、調査・比較・分析する。

CiNiiで検索すると(2022年2月14日現在)、非常持ち出し袋に関する研究で、清水・千葉(2019)以降に出版されたもの(引用できなかつた論文を含む)は3本であった。うち1つは学会発表であり、高校生が自然災害リスクに対する備えとして、非常持ち出し袋の準備を高く認識していることを報告していた(青木, 2018)。もう1つは非常持ち出しベスト(防災ベスト)の紹介(由里, 2020)であった。これらは、どちらも本論文とは関連のないものであった。

柿本・上野・吉田(2017)は、「自然災害に対するリスク認知が高くても、そのリスクへの防御行動を取らない」こと、すなわちリスク認知パラドックスを、減災行動の防御動機理論の視点から検討した。この理論では自然災害のリスク認知と減災行動のコストの両方を考える。過去20年以内に大きな水害または土砂災害を経験した6地区を対象にアンケートを実施したところ、非常持ち出し品の備えには、何を準備したら良いかわからない、準備が「面倒」という要因が大きく関係していることが明らかになった。

柿本ら(2017)は、災害関連サイトの閲覧コストが、非常持ち出し袋の充実を阻む可能性を示唆する点で、我々の研究に大きなヒントを提示する。千葉・清水(2021)で報告したように、K市では災害関連サイトを「知らない」が8割以上と非常に多かったからである。本研究では、災害関連サイトの閲覧経験以外の要因として、防災教育を取り上げることにした。

方法

1. 参加者・分析対象者

千葉・清水(2021)の研究と同じである。すなわち2018年10月16日(火)に開催されたK市のすべての保育所・認定こども園の主任保育士等を対象とした研修(各園1名)に参加した保育者を参加者とした。参加者数は212名であり、全員が以下に述べる調査票に回答した。しかしながら材料に詳述するが、調査票の一部に構造上のミスがあり、187名分の回答のみを分析した。分析対象者は187名である。

2. 材料

作成した調査票の一部を図1に示す。調査票は3ページからなり、「A. 回答者について」「B. 自然災害に関する研修などについて」「C. 非常持ち出し袋について」という3つの内容を調べるものであった。それぞれの項目は、千葉(2016)をもとに作成した。本研究で焦点を当てたのは、このうちCである。なお、AとBについては千葉・清水(2021)の付票に記載している。

図1の波線部にミスがあり、調査票にない設問の番号が書かれていた。手順で述べるように口頭で修正した。

3. 手続き

研修は第1著者が講師を務めた。「災害への備えと危機管理」について講演した。講演の最後に協力を依頼し、調査票を配布し、その場で記入を求めた。本研究の主たる関心である「C. 非常持ち出し袋について」のところにミスがあることが調査中に発覚した。そこで講師である第1著者が、口頭で図1のように答えることを指示した。

結果

1. 全体の分析

(1) 回答者について

187名の回答者のうち、7名は非常持ち出し袋等が「ない」と回答した。そこで以下では180名分のデータを分析した。表1に運営主体別、種類別にみた参加者の所属園の内訳を示す。12名は園の種類または運営主体の設問に回答しなかった。

表1. 運営主体別、種類別にみた参加者の所属園（人数）

		園の種類		
		保育園	認定こども園	計
運営主体	公立	56	2	58
	民間	47	63	110
	計	103	65	168

(2) 非常持ち出し袋の内容について

表2の第2列は、非常持ち出し袋に入れているものとして○がついた割合（％）をその値が大きい順に示したものである。「救急用品」と「ビニール袋」は90％以上の回答者が○をつけていた。80％を超えたものは、「タオル」「ミネラルウォーター」「紙おむつ」であった。20％以下のものは、「あめ」「携帯電話充電器」「防災マップ」「防災関係機関一覧表」「現金（小銭）」であった。

表2の第3列は、清水・千葉（2019）の表2から算出したものであり、2014（平成26）年1月から2月にかけて行った全国調査で、保育所と認定こども園の回答の重みを書けない平均値である。「救急用品」が90.2％で最も値が大きく、本研究の結果と同じであった。第3列で次に大きい値は「園児名簿」で85.5％であり、80％を超えるものは2つしかなかった。どちらの調査でも上位に位置したものは、「救急用品」「ビニール袋」「タオル」であった。20％以下のものは「あめ」だけであった。

表2. 非常持ち出し袋に入れているもの（％）

	全体	清水・千葉 (2019)より 算出	園の種類			運営主体		
			保育所	認定 こども園	検定結果	公立	民間	検定結果
20.救急用品	93.9	90.2	93.4	95.7		96.6	93.0	
10.ビニール袋	90.0	68.0	90.6	91.3		96.6	86.8	公>民
11.タオル	86.7	64.0	86.8	85.5		94.8	81.6	公>民
07.ミネラルウォーター	86.1	51.0	91.5	78.3	保>認	96.6	81.6	公>民
09.紙おむつ	85.0	46.7	90.6	78.3	保>認	94.8	79.8	公>民
12.ウエットティッシュ	78.9	64.6	83.0	73.9		79.3	77.2	
08.着替え	73.9	47.4	78.3	71.0		94.8	64.0	公>民
15.筆記用具	64.4	58.7	68.9	60.9		74.1	59.6	
03.緊急時連絡・引き渡しカード	58.9	64.5	68.9	44.9	保>認	69.0	53.5	
01.園児名簿	58.3	85.5	60.4	55.1		60.3	57.0	
13.おんぶひも	52.8	48.9	64.2	34.8	保>認	69.0	45.6	公>民
18.ラジオ	38.9	38.2	41.5	34.8		25.9	45.6	公<民
06.哺乳瓶	28.9	21.2	31.1	26.1		32.8	27.2	
02.出席簿	28.3	46.2	26.4	29.0		31.0	27.2	
16.ロープ	27.8	21.8	28.3	27.5		22.4	30.7	
17.現金（小銭）	16.7	24.0	21.7	10.1	保>認	17.2	16.7	
05.防災関係機関一覧表	16.1	27.4	19.8	11.6		12.1	17.5	
04.防災マップ	15.0	21.6	15.1	15.9		12.1	16.7	
19.携帯電話充電器	14.4	21.0	16.0	13.0		1.7	21.9	公<民
14.あめ	10.0	18.6	7.5	14.5		3.4	13.2	公<民

2. 非常持ち出し袋に入れるものの取捨選択に影響する要因の分析

(1) 保育所と認定こども園の比較

表2の園の種類は、保育所と認定こども園の別に○がついた割合を示したものである。2（園の種類；保育所、認定こども園）×2（○の有無；あり、なし）の χ^2 検定の結果が5%水準で有意であったところには、検定結果としてその差を不等号で示した。次の5項目で有意差があった。すなわち、「ミネラルウォーター」「紙おむつ」「緊急時連絡・引き渡しカード」「おんぶひも」「現金（小銭）」で有意差があり、いずれも保育所の方が認定こども園よりも○がついた割合が大きかった。

清水・千葉（2019）では、保育所と認定こども園以外にも幼稚園も調査していたので、直接の比較は困難であった。

(2) 公立園と民間園の比較

表2の運営主体は、公立園と民間園の別に○がついた割合を示したものである。2（運営主体；公立、民間）×2（○の有無；あり、なし）の χ^2 検定の結果が5%水準で有意であったところには、検定結果としてその差を不等号で示した。次の9項目で有意差があった。「ビニール袋」「タオル」「ミネラルウォーター」「紙おむつ」「着替え」「おんぶひも」では、公立園の方が民間園よりも○がついた割合が大きかった。「ラジオ」「携帯電話充電器」「あめ」では、逆に民間園の方が公立園よりも○がついた割合が大きかった。なお、清水・千葉（2019）ではこの運営主体の差は分析していなかった。

(3) 自然災害に関連する研修の受講経験の有無の比較

表3の第2列と3列は、「あなたはこれまでに自然災害に関連する研修を受講したことがありますか」と尋ねて、「ある」と答えた者（受講）と「ない」と答えた者（未受講）の別に○がついた割合を示したものである。2（研修；受講、未受講）×2（○の有無；あり、なし）の χ^2 検定の結果が5%水準で有意であったところだけ、各群で○がついた割合を示した。「タオル」と「筆記用具」の2項目で有意差が見られた。「タオル」では未受講者の方が受講者よりも○がついた割合が大きかった。「筆記用具」では逆に受講者の方が未受講者よりも○がついた割合が大きかった。

(4) 防災教育実施の有無の比較

「子どもに対して自然災害に関する防災教育をしていますか。自然災害毎に、昨年度の実施状況をお答え下さい」として、災害ごとに「ア. している（年 回数程度）」「イ. していない」のいずれかを選んでもらった。表3の4列目以降は、「している」を選んだ者（実施）と「していない」を選んだ者（未実施）の別に○がついた割合を示したものである。2（防災教育；実施、未実施）×2（○の有無；あり、なし）の χ^2 検定の結果が5%水準で有意であったところだけ、各群で○がついた割合を示した。

地震の防災教育では、「20. 救急用品」でのみ有意差が見られた。実施群の方が未実施群よりも○がついた割合が大きかった。防災教育をしていない園は少なかったが、顕著な差であった。豪雨の防災教育では、「03. 緊急時連絡・引き渡しカード」「07. ミネラルウォーター」「09. 紙おむつ」「12. ウエットティッシュ」の4項目で有意差があった。いずれも実施群の方が未実施群よりも○がついた割合が大きかった。

表3. 非常時持ち出し袋に入れているものに影響する要因の分析 (%)

	自然災害に 関する研修		防災教育														
	受講 N=77	未受講 N=98	地震		豪雨		洪水		暴風		津波		豪雪		噴火		
			実施 N=172	未実施 N=6	実施 N=135	未実施 N=40	実施 N=133	未実施 N=43	実施 N=83	未実施 N=86	実施 N=108	未実施 N=66	実施 N=4	未実施 N=166	実施 N=1	未実施 N=170	
01.園児名簿																	
02.出席簿																	
03.緊急時連絡・引き渡しカード			63.7	42.5													
04.防災マップ												75.0	14.5	100.0	15.3		
05.防災関係機関一覧表																	
06.哺乳瓶																	
07.ミネラルウォーター			89.6	75.0	90.2	74.4											
08.着替え																	
09.紙おむつ			88.9	72.5													
10.ビニール袋																	
11.タオル	79.2	92.9															
12.ウエットティッシュ			82.2	67.5	85.0	60.5	86.7	72.1									
13.おんぶひも																	
14.あめ							15.7	4.7									
15.筆記用具	72.7	58.2															
16.ロープ																	
17.現金(小銭)																	
18.ラジオ							48.2	32.6									
19.携帯電話充電器												75.0	13.3				
20.救急用品			94.8	66.7													

洪水の防災教育では、「07. ミネラルウォーター」と「12. ウエットティッシュ」の2項目で有意差があった。どちらも実施群の方が未実施群よりも〇がついた割合が大きかった。暴風の防災教育では、「12. ウエットティッシュ」「14. あめ」「18. ラジオ」の3項目で有意差があった。いずれも実施群の方が未実施群よりも〇がついた割合が大きかった。

豪雪の防災教育では、「04. 防災マップ」と「19. 携帯電話充電器」の2項目で有意差があった。いずれも実施群の方が未実施群よりも〇がついた割合が大きかった。噴火の防災教育では、「04. 防災マップ」の項目で有意差があった。実施群の方が未実施群よりも〇がついた割合が大きかった。豪雪と噴火で防災教育をしている園は少なかったが、顕著な差であった。

3. 非常持ち出し袋等の内容の点検と検討

「非常持ち出し袋等の内容の点検は、どの程度の頻度で行っておられますか」と尋ねて、「ア. 年（ ）回」「イ.（ ）年に1回」「ウ. 行っていない」の3つの選択肢を提示し、アまたはイの場合は、数字も書くように求めた。その結果、「ア. 年（ ）回」を選んだ者は138名（76.7%）、「イ.（ ）年に1回」を選んだ者は32名（17.8%）、「ウ. 行っていない」を選んだ者は3名（1.7%）であった。記入された回数を調べたところ、アの場合は、年（1）回が最も多く50.0%、次いで年（2）回が27.5%であった。イの場合は（1）年に1回が最も多く83.9%であった。

「非常持ち出し袋等の内容の検討は、どの程度の頻度で行っておられますか」と尋ねて、「ア. 年（ ）回」「イ.（ ）年に1回」「ウ. 行っていない」の3つの選択肢を提示し、アまたはイの場合は、数字も書くように求めた。その結果、「ア. 年（ ）回」を選んだ者は138名（76.7%）、「イ.（ ）年に1回」を選んだ者は32名（17.8%）、「ウ. 行っていない」を選んだ者は3名（1.7%）であった。記入された回数を調べたところ、アの場合は、年（1）回が最も多く72.0%、次いで年（2）回が20.0%であった。イの場合は（1）年に1回が最も多く66.7%、次いで（0）年に1回が17.9%であった。0年に1回は、これまでに検討をしたことがないのかもしれない。

考察

本研究では、防災教育の実施が非常時持ち出し袋に入れるものの充実につながることを示した。ではどのような防災教育がよいのだろうか

本研究と全く同じ調査対象である千葉・清水（2021）によると、20%以上の園が行っている子どもに対する防災教育の方法は、災害ごとに次の通りであった。すなわち、地震では保育者によるお話（95.1%）、絵本・紙芝居等（66.5%）、災害経験者によるお話（22.7%）、豪雨では保育者によるお話（90.6%）、絵本・紙芝居等（31.5%）、洪水では保育者によるお話（91.4%）、絵本・紙芝居等（30.9%）、暴風では保育者によるお話（87.6%）、絵本・紙芝居等（28.9%）、津波では保育者によるお話（88.2%）、絵本・紙芝居等（26.0%）であった。

また同じく千葉・清水（2021）によると、20%以上の園で行われている子どもに対する防災教育の内容は、災害ごとに次の通りであった。すなわち、地震では、災害が起きる原因の話（26.9%）、災害発生時の身の守り方（93.4%）、避難場所への移動（84.0%）、

避難場所での過ごし方（20.8%）、豪雨では災害が起きる原因の話（27.4%）、災害発生時の身の守り方（56.6%）、避難場所への移動（51.4%）、洪水では災害が起きる原因の話（32.1%）、災害発生時の身の守り方（56.6%）、避難場所への移動（57.1%）、暴風では災害発生時の身の守り方（37.3%）、避難場所への移動（29.7%）、津波では災害が起きる原因の話（23.6%）、災害発生時の身の守り方（49.1%）、避難場所への移動（46.7%）であった。

このような知見をヒントに防災教育を各園が考えることが、各園の非常持ち出し袋を充実させることにつながるであろう。

なお千葉（2016）は、保育内容と防災教育の関係も調査している。具体的には、「幼稚園教育要領、保育所保育指針、認定こども園教育・保育要領における教育または保育の内容として子どもが経験する次の事項を、防災教育の指導内容に関連づけていますか。関連づけているすべての事項に○をつけて下さい（複数回答可）」として、保育内容の5領域の「内容」をすべて提示した。その結果、領域「健康」の「危険な場所、危険なあそび方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する」は70%を越えるなど高かったが、様々な「内容」で25%を超えて○がついていた。この結果は、防災教育には広がりがあり、子どもにとってその経験は「育みたい資質・能力」につながることを示唆している。

非常持ち出し袋は、用意して終わるのではない。いざというときだけでなく、避難訓練時にも活用する必要がある。そのためには普段からの点検や見直しが必要となる。その点検や見直しを子どもと一緒にするべきではないか。非常持ち出し袋の中身が子どもにとって身近なものになり、大切にしたり、関わったり、考えたり、試したりする対象になると期待できる。このことこそ、保育の内容の領域「環境」の内容にもつながるであろう。

また、非常持ち出し袋の中身を絵にした絵本や紙芝居を作り、絵を見せながら、言葉で様々なやりとりをすることもよいであろう。そうすることで非常持ち出し袋の中身が子どもにとって身近なものになり、かつ領域「言葉」の「考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現する」という経験にもなると期待できる。加えて、家庭における非常持ち出し袋の点検や見直しを促すことにもつながる可能性がある。

なお本研究は、K市の保育所や幼保連携型認定こども園が組織として準備している非常持ち出し袋の中身を分析したものである。そこでまずはK市の保育所や幼保連携型認定こども園に結果を返し、非常持ち出し袋の点検や見直しに活用してもらうことが大切であろう。しかしそれだけで終わるのは、災害対策・防災対策としては十分とは言えない。命に関わるからである。K市以外の自治体に本研究の結果を示し、各自治体の保育所等で非常持ち出し袋の点検や見直しに活用してもらうことが可能である。また同じK市でも、保育所や幼保連携型認定こども園以外の組織、例えば小・中学校や高等学校、さらには学校以外の企業等でも災害時の非常持ち出し袋は備えているであろう。その点検や見直しにも、本研究は利用可能である。このような非常持ち出し袋の点検や見直しを促し、その効果を検証することが今後の課題である。

引用文献

- 青木幸子：高校生の災害リスク認識からみるトピック学習の効果 日本家庭科教育学会大会・例会・セミナー研究発表要旨集，61（0），71，2018年
- 千葉武夫：科学研究費助成事業学術研究助成基金助成金基盤研究（C）平成25年度～27年度「幼稚園・保育所・認定こども園における災害に対応した人的システムに関する調査研究」課題番号25516022研究成果報告書，2016年
- 千葉武夫・西村重稀・吉岡眞知子・森俊之・碓氷ゆかり・中島一・波田埜英治・水上彰子・成田朋子・青井夕貴・清水益治：幼稚園・保育所・認定こども園における非常時に持ち出す名札や名簿の実態 帝塚山大学子育て支援センター紀要，1，11-17，2020年
- 千葉武夫・清水益治：K市の保育所等における防災教育の実態調査 帝塚山大学子育て支援センター紀要，2，9-21，2021年
- 波田埜英治・清水益治・吉岡眞知子・青井夕貴・森俊之・西村重稀・碓氷ゆかり・水上彰子・成田朋子：児童養護施設の災害時におけるマニュアルに関する研究：児童養護施設における災害マニュアル実態調査及びマニュアル作成のための手引きの策定 研究助成論文集（52），163-170，2016年。
- 柿本竜治・上野靖晃・吉田護：自然災害リスク認知のパラドックス解消に向けた減災行動の地域性の検証 土木学会論文集D3（土木計画学），73（5），I_57-I_68，2017年
- 森俊之・碓氷ゆかり・青井夕貴・波田埜英治・清水益治・吉岡眞知子・成田朋子・水上彰子・西村重稀・千葉武夫：保育士養成必修科目における災害・防災教育の実態：授業科目および授業担当者の属性による比較 保育者養成教育研究（1），121-129，2016年
- 清水益治・千葉武夫：幼稚園・保育所・認定こども園における災害マニュアルの実態 帝塚山大学現代生活学部紀要，12，75-84，2016年
- 清水益治・千葉武夫：幼稚園・保育所・認定こども園における災害時非常持ち出し袋の実態 帝塚山大学現代生活学部紀要，15，41-49，2019年
- 清水益治・千葉武夫・碓氷ゆかり：放課後児童クラブにおける災害マニュアルの実態に関する研究 帝塚山大学現代生活学部子育て支援センター紀要，1，55-65，2016年
- 由里尚子：備えて安心！非常持ち出しベスト（特集 地震・水害・入院 コロナ時代の備え） 婦人之友，114（9），12-16，2020年